



小山悦子、一年ぶり二度目の個展である。小山は今回、特大から極小までの油彩 22 点を展示した。いずれもモノクロームの世界であり、主に指で描いていると推定される。前回の展評で、私は小山が心で描いていることを指摘したが、今回の作品群も同様である。しかし今回の出品した作品の特徴は、作品のスタイルに統一感があることだ。画廊内に一つの鼓動が調和する心地よい世界観である。モノクロームの作品群は、世界に色があることを忘れさせる。同時に、世界には色が溢れていることも教えてくれる。

指先による筆致は、生命力を生み出している。生きることの喜びを死ぬことの憧れにせず、確実に日々を過ごす決意がここには込められている。

入り口に掲げられた文章を転載する。「旧約聖書の時代から人と人は戦い続けて来ました。これが人間の宿命なのでしょうか！ / 生命の星、地球は戦いではじまり、戦いで終わるのでしょうか？ 人間の救済 (relieve) に命を捧げ祈り続けた人々がいました。御一緒平和を祈りませんか。」

小山は制作と格闘を続け、平和への祈りを捧げる。

